

「主は深く憐れんで」

—マタイによる福音書講解説教 66—

詩篇

第145篇 10節～16節

マタイによる福音書

第14章 13節～21節

説教 岡村 恒 牧師

「イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。」(14節)主イエスはガリラヤ湖畔での説教の後、ひとり、人々から離れて行かれました。すると人々は、主イエスの後を追ってやってきました。主はこの群衆をご覧になって、腸(はらわた)が激しく揺すぶられるような思いを抱かれました。

人々は、主イエスから多くを得たいと思ってやって来ました。皆、晩ご飯のことや帰りの道など少しも考えずに、ただひたすら主イエスの後を追って来たのです。多くのものが欠けていたので、主イエスから得たいと思いました。喜びや希望、命を求めていたのかも知れません。後のことを考えることなく、ただ主イエスの後を追って来ました。

4つの福音書の全てに共通して記されている出来事は、主イエスのご受難と死、そして復活の物語と、この5千人の給食の物語です。他の福音書では、弟子たちが何をしたとか、5つのパンと2匹の魚を持っていたことの話が登場します。マタイによる福音書は、主イエスがいったい誰のために、何のためにこの食事をお与え下さったかということに集中します。

人々には欠けていました。本当に彼らを生かす命に欠けていました。だから、主イエスは「深くあわれんで」下さいました。病人をいやしても、なおそこには魂の飢えがありました。神から遠く離れてしまった者の欠乏は深刻でした。私たちは今朝、神によってこの聖堂に集められました。主イエスがこの私たちを深くあわれんで下さったので、この礼拝が実現しています。私たちがここにいる理由は他にありません。

この日、主イエス・キリストが全ての出来事を支配しておられます。まず主イエスがひとりで船で出かけて、場所を設定されました。人々はこの主イエスを追って集まって来たのですが、実は、自分自身でこの場所に来たのではなくて時と場所を用意して下さった主イエスに招き集められました。弟子たちは、目に見える現実だけに注目しました。群衆の欠乏を目にして、解散させるようにと主イエスに進言しました。食物の欠乏こそが最大の問題だと思われたのです。そしてこの欠乏は、群衆自身の力によっては解決できないものでした。さらに主イエスは、弟子たちにこの課題を解決するようにと命じられ

ました。弟子たちは自分の手を見るようにして、自分の可能性について考えました。大きな欠乏を目に、自分の力ではどうしようもない現実を知ります。何と惨めな人間だろうか、と自分のことで嘆く他ないことを思い知ります。

わずかの食料を目にして、ほんの小さな可能性さえ見いだせない弟子たちがそこにいました。主イエスは、群衆をすわらせ、パンと魚を手に取り、祝福し、パンをさいて弟子たちにお渡しになりました。ここで主がなさったことは、そのままこの後、十字架の上で主ご自身の身に起こります。私たちがあわれんで下さった主イエスの肉が裂かれ、与えられ、私たちに命が与えられたのです。主は十字架の上で、私たちに命を与え、満腹させるために、天をあおいで祈り、ご自身を与え尽くして下さいました。

この日、主イエスから与えられたパンと魚を食べた人々は、繰り返しこの出来事を思い出し、語り続けたと思います。主イエスがご自分の命を与えて下さって、私たちの最大の欠乏を満たして下さいたことを、思い出して語りました。

この地上をどれほど豊かに歩んだとしても、なお再度に、まことの命の糧を欠いているなら、その人生は空しい人生です。ただ滅び去っていくしかないからです。代々のキリスト者は、主の食卓と呼ばれる聖餐礼典の食卓を囲むたびに、あの日人々を満腹させて下さった主イエスを思い起こしてきました。

私たちがまことの命によって満腹させ、飢えを満たして下さるだけでなく、この食卓から主の命があらわれ出てきました。み子の霊、助け主なる聖霊が降った後、弟子たちも、私たちも主の食卓を囲み続けながら、主イエスが食卓の主であることを語り続けてきたのです。ご自身の命を全て与え尽くすほどに、私たちが深くあわれんで下さったこの主イエスこそ、食卓の主、救い主です。

私たちはこの聖餐の食卓で主イエスの命を受け、味わいます。全身全霊を新しくして、命を注ぎ入れて下さることを味わい知ります。そしてここから、主イエスを宣べ伝える者として送り出されます。主の深いあわれみを知る者として、主の食卓に帰って来る時まで、歩み続けます。

(記 岡村 恒)